

吉川英治^{歴史時代}文庫 55



新平家物語(九)

吉川英治^{歴史時代}文庫 55

新・平家物語(九)



一九八九年七月十一日第一刷発行
一九九三年一月十二日第七刷発行

著者——吉川英治

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号一一二—〇一

電話 編集部 〇三—五三九五—三五〇五

販売部 〇三—五三九五—三六二六

製作部 〇三—五三九五—三六一五

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送り
ください。送料小社負担にてお取り替えます。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196555-7

©吉川文子一九八九(文2)

言

江苏工学院图书馆



藏平家物語

英治時代文庫

55

物語
(九)

目次

くりからの巻

7

一門都落ちの巻

233

略系図

433

註解

437

不思議なご縁 佐多芳郎

440

国民作家と国民文学(一) 粕谷一希

442

新・平家物語
(九)

くりからの巻

揺れ山吹

その年、義仲は、越中の伏木にいた。

射水川の渡しをひかえて、国府の古い町があり、国守もいたのだが、去年、木曾軍の侵攻に、ひとたまりもなく潰れて、前の国守は、都へ逃げてしまった。

義仲と、麾下の兵馬は、そのあとへはいった侵略の主人なのである。つまり前々年の、越後国府の占領のときと、おなじ過程と姿だった。

そしていまかれの勢力は、信州、越後、越中、加賀、能登の一部までを翼下にしていた。^{*てんぼ}天馬空を行くとは、そのまま木曾軍の白旗のことといつてよい。「木曾殿」の名を聞けば泣く子どもだまる、と北陸の親たちはいう。

わけても先年、都から下向した平通盛、経正などの追討軍をさえ、越前の水津や敦賀に迎え撃って、鎧袖の一触ともせぬ木曾勢の強みを眼のあたりに見てからは、それまで、日和見態度だった土着の武族も、あらそって、かれの陣門に忠誠をちかつて来た。

「多端なおりだ。いちいち、会ってはおれぬ。日を期して、打ちそろって来い」
 かれは、それらの者へ、に^{*}べもなくいつて、突っ歸した。日をあらためて、伏木の館
 で、ひとまとめにして会ったのである。

「参つたるは、たれたれぞ」

と、その日、義仲の問いに、一同そろって、かしらを下げ、順々に、名のつた。

平泉寺の長吏^{へいせんじ}齋明^{ちやうりさいみん}、稲津新介、佐美の太郎、林光弘、光明の兄弟、倉光三郎。

また、加賀の富樫^{とがし}党、井上党、津能^{つの}党。能登の土田党。越前の野尻党、河上党、石黒
 党の者たち。

すべて、それらの面々は、小さくとも郷党の首領とか、一族の主^{あるじ}ではあつた。

——が、義仲は、さして、よろこぶ風もなく、およそに、うなずき、うなずいた後、
 「おのおのの参上、神妙。だが待て、義仲には、にわかにも信じがたいぞ。なんとなれ
 ば、われより招きもせぬに、こう気をそろえて罷^{まか}り出たは大きな不審だ。じつは平家の
 方人^{*かとうど}して、木曾を計らんとために来たのではないか」

と、疑いぶかい眼で、一つ一つの面構^{つらがま}えを、ながめまわした。

「あいや、仰せではおざれど」

平泉寺の齋明は、ひとひぎ、すすめて、

「野僧も元は、三井寺の一法師ではありましたが、去^いぬる年、無法にも平家は同寺の堂
 塔^{しつかい}を悉皆焼き亡ぼし、あまつさえ、園城寺衆^{おんじやうじしゆ}といえは、これを仮借^{かじやく}なく捕えて獄へ投じ

まいた。——そのおり、難をのがれて、越前、加賀、越中などに移住した者は数知れませぬ」

この斎明は、僧侶そうりよだけに、弁もたつし、事理もあきらかであった。

「さらに、お聞き及びでもございましょうが、平家はその後、またまた、狂兵をかりたてて、南都焼き討ちの暴をあえてしまいました。東大寺、興福寺の僧は、そのおりも幾十名となく北陸にのがれ、いつかは、平家に仏罰のほどを思い知らせんと、語らい合つていたものでござる。……きょう、これへ参上の者どもは、みな平家に恨みこそいだけ、二心ある者ではございません。御賢明な殿、北陸人の一徹いつてつは、よくお見通しとは存じますなれど」

「よし、よし。斎明のいい条、およそは思い当たる。とはいえ、念のためよ。義仲に仕うるからには、神明に誓つて腹黒はらぐろあらじ、と一人一人、誓文せいもんを書いて出せ。そのうえにて、臣下の列に加えん」

もちまえの野人やじんぶりは変りようもないが、義仲の構えやことばには、近来、特に威厳を意識しているふうがあった。

もつとも、木曾谷で旗あげしたときは、せいぜい五、六百の小勢であつたものが、市原野いちらのの合戦に勝ち、以後、転戦のたび兵力を加え、横田川原では、四千騎近くと、鰻うなぎのぼりにふえ、城ノ四郎長茂じょうろうながもちを破つて、越後国府にすわった後は、幕下一万余騎となつていた。

それが、今日では、ここ越中を根城に、北陸の大半以上は、かれの占むる版図なのである。全兵力をうごかせば、おそらく三万騎は動員しうることであらう。思えば、きのうの木曾冠者ではない。

ぬばたまの

夜はふけぬらし

玉くしげ

ふたかみ山に

月かたむきぬ

「……たれだ、簾の外で、うとうているのは」

ふと、うたた寝の身を半ば起こして、義仲は、ほの暗い次の室をふり返った。

簾の蔭に、たれか、うずくまっている。そこに灯はなく、ここの燭も、風に消えていた。それなのに、薄明るいのは、どこからか映す月の光にちがいない。

ああよく寝たと思う。いや、酔ったと思う。

酒宴のあと、根井、楯、樋口などの群臣が、それぞれ退がって行ったのまでは、覚えていた。

あとは知らない。

余りの心地よさに、寢所へはいるのも煩わしく、巴や葵にも手こずらして、動かなか

ったものだろう。——そしてかの女たちお互いも、例の、こまかな心理の綾から、さいごの侍かしずきを譲ゆずりあい、自分において、夜殿よどのへ退さがったものとみえる。

……そう、宵からのことを、義仲が思い出している耳へ、

「お眼めざめでございましたか」

と遠い所で女の、きれいな声がした。

「おう、そちか」

「はい」

「いや、簾の外で、いま朗詠ろうえいしていたのは、そちかと訊きくのだ」

「わたくしでございました」

「なんで、夜半も過ぎたのに、ひとが眼をさますような声で、朗詠などしていたか」

「おゆるしくださいます。わたくしは、葵あおいさまの雑仕女ぞうしのめ。……おいつけをうけて、殿

さまをお迎えに参ったのでございましたが」

「起こして来いと、葵ノ前の、いいつけだったか」

「はい」

「ならば、なぜ、側へ来てゆり起こさぬ」

「でも……わたくしなどが、御寝ごよしのおそばへ寄るのは、余りにおそれ多い気がいたしまして」

「おそれ多いと。……はははは、それで、よそながら朗詠などして、醒さめよ、起おきて

よ、と念じていたのか。雑仕女にしては、やさしい心根^{こころね}。よしよし、行^いってやろう」

「ありがとうございます」

「が、ひどく渴^{かわ}いた。酔いぎめの水。水をひと口くれい」

「はい」

細殿をさがって行く。やがて水瓶^{すいびん}と椀^{わん}とを台盤に捧げ、簾のすそまで戻^{かへ}って来た。が、いつまでも、そこに、もじもじ、手をつかえている様子だった。

「何^{なに}しておる。ここへ持つて来い」

義仲は、癪^{かんしゃく}癪^{しゃく}声を出した。

伸びをして、すわり直した風である。

かの女は、おどおどと、義仲の前へすすんで行^いった。水瓶を把^とって注^つぐ手が、微^{かす}かにふるえている。

その冷水を、ひと息に飲みほし、器を、かの女の手へ返しながら、義仲は、ほんとに、眼を醒^さました。

「はて。そちは、見たことがある……」

雑仕女は、からだじゅうではじらった。

やっと十六、七であろう。人の凝視にも耐え得ない初々^{ういうい}しさである。まして、義仲のひとみに、近々と見まもられ、消えも入りたげな姿であった。

「そちは、山吹とはいわぬか」

「……はい」

「やはり、あのおりの、山吹か」

義仲は、思い出した。

去年の秋、越前の水津に、出陣していたときのこと。

月のいい夜であった。義仲は、ひとり幕営を出て、武者の寝ぎまを、見まわった。また、その戻りに、娘子軍じやうしぐんだけのいる女房おんなせうへいの柵さくへも立ちまわった。

草露にすわって、一人の女雑兵が、手紙らしいものを読みふけていた。義仲がそつと後ろに立ったのも知らないでいる。——が、やがて気づくと、びっくりして手紙を隠した、「……恋文か」と、義仲がいうと、「母からのもの」と答えた。読んでいたのは女文字にちがいない。義仲は、わざと、からかってみたのである。

それから「柵の内へ案内せよ」というと、女兵は「なに御用ですか」と、しっかりした言葉でいい「ここの女房屯たむろは、葵ノ前様の組です、葵さまのおゆるしなくば」と、なんととしても、肯きかないのだ。「名は」と、問うと「山吹」と答えた。

——義仲の記憶は、ただそれだけのことでしかない。けれど、月の下で見た可憐かれんな小娘の雑兵姿は、今でも瞼まぶたに描けるほど心に残った。

しかし、いま見る山吹は、その夜の、露しとどな具足姿の女雑兵とは違う。もっと、もっと、きれいだである。化粧もし、黒髪をすべらし、小袷衣こうちぎに緋袴ひばかま姿だった。急に思ひ出せなかったのもむりはない。

「そちは近ごろ、葵の側近うに、召し使われているのか」

「はい。……」

「葵の組は、伊那女いなおんなばかり。そちも、伊那の生まれか。そうである。伊那はどこか」

「……あの」

山吹は、息を弾はませた。

こうして、灯も人もない所で、落ち着いて話していることが、何やら、そら恐ろしかった。罪でも犯しているように、わななかれてくるのである。

「——これ、なぜ逃げたがるぞ」

義仲のひぎは、かの女の袴はかまを踏んでいた。つと、起とうとした山吹は、よろめいて、折りくずれるようにまたすわった。

「でも、葵ノ前様が、どんなに、お待ちかねか知れませぬ。どうぞ、お渡り遊ばしてくださいます」

「まあ、よいわ。夜明けにも間があるまい。いっそ、このままいよう。……のう、山吹」

「あつ、いけませんっ、殿さま」

「なぜ騒ぐ。声を立てるな」

「い、いけません。いけません。あ、あれ」

「なにを恐こわがる。この手枕に、こう、そなたの身を任してみせい」

「あつ。……おゆるしなさいませ。ええ、もう、どうしましようっ」

山吹は、身もだえして、自分を守るべく、自分を抱きしめた。たしかに、せつなの思惟は、そうであつた。けれどもかの女が死力の中に抱いていたのは、もう、自分でないものの重さであつた。

「……………」

叫ぼうとしたが、唇は唇にふさがれ、常には、眩^{まぼ}ゆくて、仰がれもせぬお人の顔が、自分の顔へ、ひたと、火の熱さで打ち重ねられていた。睫毛^{まつげ}に睫毛がさわるほど、近々と、憎^{にく}々しい眼が、くわっと、かの女の眼を、わざと見すえようとする。かの女が面を横にすれば横へ、仰^のければ、伸び追つて、鷹^{たか}が小鳥を捉えたように離さない。

——力も尽き果て、すべては、窒息^{ちっそく}しきつたような、あやしい、しじまの一瞬^{ひととき}がすぎた。

月も、廂^{ひさし}に低くなっている。

部^{しとみ}をもる月の格子^{こうしめ}目のなかで、さやと、黒髪が鳴った。ようよう、菅^{すが}だたみから身をもたげた影は、しくしくすすり泣いていた。けれど、ふとわれに返ると、急に^た起つて、簾のすそをあげ、濡れた面を、袖につつんだまま、細^{ほそ}殿の廊を、眼に何もものもなく走り出した。

はたと、かの女は、たれかにぶつかった。その人を、葵ノ前と知ったとき、山吹は、しどけない自分の姿に、卑屈なほど、うろたえた。あわてて釣^{つり}殿通^{どのがよ}いの角縁^{すみえん}の端に、身